
僕らのままで

奥山メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らのままで

【Nコード】

N5824J

【作者名】

奥山メイ

【あらすじ】

秋空の下、2つの恋が、愛に変わろうとしていた…じれったい恋と、甘酸っぱい恋と。青春のキラキラした1ページを、あなたもめくってみて下さい。

＊１＊

「あついつ!!」

そう叫んだのは、波流はるだった。

「どうした？」

僕は、とっさにトングを鉄板の上に放り出し、彼女の元へ駆け寄った。

それは、本当に瞬間的なことだった。

——別に、カッコつけようとした訳じゃない。ただ、波流の上げた悲鳴に驚いた。彼女の身に、何かが起こるのが、怖かった……—
それだけだ。

紅葉が、はらはらと散った。花の如く、絶え間なく。その隙間から差し込んでくる光は、和やかに優しくかった。

「あ……」

波流が、小さく声を出して、身じろぎした。

「——ありがと。涼クン……」

気が付くと、僕は彼女を抱き抱えるようにして、パチパチと爆ぜる焚き火から引き離していた。

そこに、意識の流れというものは全く無かった。彼女が悲鳴を上げた瞬間――脳に思考する暇も与えないほど素早く、僕の身体は波流へと向かっていたのだ。

バンガローの周りは、しんと静まり返っていた。
肉やらジャガイモやらを抱えた仲間達は、みな啞然として僕と波流を見比べている。

「涼くん…離して…」

恥ずかしがるように、波流が言った。擦れた、小さな声だった。

「…息できないよ…」

「あつ。ご、ごめん」

僕はハッとして、慌てて波流から手を離れた。無意識の行動は、強く強く、彼女を抱き締めていたのだ。

途端に、ヒューヒューと野次が上がり始めた。仲間達が、最初のショックから回復したらしい。

「オイ、やってくれるじゃねえか涼」

「波流ちゃんのこと好きなのかよーっ」

「お前なんか、波流ちゃんに釣り合わねえぞおっ」

「うつ、うるさいッ。大きなお世話だ!!」

僕はムキになって怒鳴った。けれど、仲間達は軍手を叩き合わせて、ゲラゲラと笑うばかり。

波流の友達・美亜だけが、複雑な顔をして僕らを見ている。

「ごめん…波流…」

僕は、自分の余りの腑甲斐なさに、へなへなとその場にへたりこんだ。

「オレ、そんなつもりじゃ…」

一筋のそよ風が、柔らかく僕の前髪を撫でていく。

ああ、情けない。

波流を想う気持ちが、とつさに前面に出てしまった。

でもまさか、仲間達全員に知られてしまうなんて。

ずっと、隠してきたことなのに…。

「涼クン」

ふわん、とレモングラスの匂いがした。波流が傍らにいるのだ。

どんちゃん騒ぎと口笛が空気を覆い尽くす中で、彼女は逃げることも、否定することもせず、僕の隣にいる。アイツらにからかわれることが、判っているのに――。

「涼クン。行こ」

波流の細い指が、僕の腕を握った。

「立って…」

言われるがままに、僕は立ち上がった。僕を見下ろしていた波流の顔が、すぐさま僕を見上げた。

「行こ」

強い口調で、彼女は言った。

「…ウン」

僕は、まるで木偶の坊になったように、ただ頷いた。もっとマシな反応が出来れば良いのに。僕は、どこまでも腑甲斐ない。

その時。

鼻腔を、ツン、と焦げた匂いが襲った。

「あーっ。隆志、トング貸せ！焦げてる！！」

「バカッ、何見てたんだよ！！」

ガヤガヤと騒ぎ声がしたかと思うと、ジュウウツ、と水が鉄板に注がれた。

「アホか——！！俺の、俺の焼おにぎりがああ！！」

哲が、絶望の悲鳴を上げている。美亜は唇をキュッと結んだまま、消えかけの焚き火に薪をくべ始めた。

「今だよ。涼くん」

波流が、僕を急かして歩きだした。

「あ、ああ」

オドオドした返事しか出来ないまま、僕はそれに従った。

——季節は、秋。

高校2年生の僕達には、まだまだ『読書の秋』は似合わない。本とは、来年イヤというほど付き合わなければならぬだろう。

僕達は、野獸的な本能を満たすため——もつとも、波流と美亜にはそんな言葉は似合わないが——『食欲の秋』を満喫している所だった。

富士五湖の一つ、西湖。

釣りで有名なこの湖畔に、バンガロー村がある。仲間の一人・隆志のじいちゃんが経営しているんだそうだ。ここで、僕らはバーベキューをすることにした。

都会と違った、綺麗な澄んだ空気、高い秋空。

静かなさざ波の立つ湖面の向こうには、色付き始めた山の端。

そして、チラッと頭を覗かせる富士山。

秋を満喫するためには、これ以上無いほど素晴らしいロケーションだ。

そんな湖のほとりに立ちながら、僕と波流は、さつきから互いに黙りこくったまま、もじもじしていた。

ふたりつきりだ。

——何か、話さなきゃ。男だろ!?

そう自分に呼び掛けてみるものの、話すべきネタが見つからない。いつもはムダに動き回っている舌が、口のなかに貼りついてしまったみたいなのだ。

「…あの、さ…」

口火を切ったのは、やはり波流だった。

華奢な身体を、ちよつと固くして僕を見上げている。ココア色の髪が、顎のラインで遊んでいるのが何とも言えず可愛らしい。透けるように白い肌は、白とブルーのストライプ模様が入ったワンピースに包まれて、とても清楚だ。

「あのさ…」

彼女は、もう一度呟いて、くりくりとした目を下に逸らせた。

『あのさ』とは言ってみたものの、続きが出てこないようだ。

波流が僅かに動くと、微かにレモンガラスの香りがした。彼女のお気に入りの香水の匂い。初夏の日溜まりのような、芳ばしさを持っている。

その香りに誘われて、僕はおずおずと波流の頬に触れた。

マシユマロのような、ふんわりした感触。

僕の指が触れた瞬間、波流は怯えたように身を強ばらせた。まるで、小さなウサギだ。

「…さつき。油、撥ねたの??」

彼女から手を離れた時、ようやく、僕の唇が言葉を生み出してく

れた。

「さっき?——さっきって……ああ……」

波流は思い出して、ちよっぴり笑った。

「ありがと。心配してくれたんだよね」

「大丈夫だった?」

「うん、大丈夫。ちょっと熱かったよ。最初はね。けど、……」

――

波流は、急に口籠もってしまった。

その先に何を言わなければいけないか、彼女は気付いたのだ。何か言いかけていた唇は、その言葉を飲み込み、きつく結ばれてしまった。その代わり、白い頬がうつすらと桃色を帯びた。

「……」

僕は聞き返した。

言ってしまったから、『しまった』と思った。どうして、こんな意地悪なことをしてしまうんだろう、僕は。

「……」

波流は、真っ赤になって俯いてしまった。

「あの……」

「じつ、ごめん。なんでもないよ」

僕は、慌てて誤魔化した。

そして、遠い湖の向こうへと視線を送るふりをした。

——そうでもしないと、波流が可哀想だった。彼女の緊張は、
メートル程離れて立つ僕にも、ビンビンと伝わってきたから。 1

仲間の前で堂々としていることも出来ないくせに、頬に触れるな
んて大胆なことをしてかした自分が、ますます許せなくなつた。

鳶が鳴いた。

チャプ…チャプ…

湖が、そつと波を岸に寄せる。

僕は、何気なく汚いスニーカーを脱いで、岸に腰をおろした。

白く小さな石がゴロゴロしている地面。手をつくと少し痛かった
けれど、すぐに慣れた。

そのまま、両の爪先を水に入れてみる。

チャプン…

すでに冷たくなった山の水が、ゼリーのように僕の足を包み込んだ。

「冷てー…」

思わず、小さく呟いた。

すると、波流が近寄ってきた。まだ頬は薄桃色をしている。

「つめたい？」

彼女が、小声で問い掛けてきた。

「うん。でも、気持ちいいよ」

僕は、必死に何でもない顔を装った。本当は、波流が近くにいてくれることが、嬉しくて嬉しくて堪らなかったのだけれど…。

「あたしも…やってみようかな」

波流が、呟いた。

おもむろにムートンのブーツを脱ぎ始める。

思わず——僕は、その一連の動作に見入った。

毛糸の暖かそうなソックスを脱ぐと、彼女の真っ白で細い足が現れた。足首には、金の華奢なアクセサリーが纏いついている。足に比べて、大きめのサイズのようなだ。

「あつ、ダメだ――」

僕は声を上げた。

けれど、遅かった。

彼女が足を湖に入れた瞬間、金のアクセサリーはふわっと浮き上がった。そのまま波に乗り、彼女の足首から逃げていく。

「あつ、ああ――あ」

波流の悲鳴も虚しく、アクセサリーは波に弄ばれながら運ばれていった。

沖へ、沖へと…。

「――残念…お気に入りだったんだけどな」
ため息と共に、波流がしんみりと言った。

その横顔は、見ているだけで僕を淋しくさせて。

なぜか、僕を突き動かした。

僕は、立ち上がった。

恐らく、撥ねる油から波流を守ろうとしたときと同じ、無意識の内に――。

2 side 波流

「涼くん!!」

私は、びつくりして叫んでいた。

いきなり立ち上がった彼。何をするのかと思ったら、ジャブジャブ音を立てながら、湖の中へと足を進めていく。

「涼くん、待って！危ないよ!!」

私は、必死に彼を呼んだ。立ち上がろうとしたけれど、湖畔の石が手足に当たって、すごく痛い。

「大丈夫。待ってて」

涼くんは、はにかんだ笑顔をチラッと見せた。

——何しようとしてるの？

私は、恐々と彼を見つめた。

決して暖かくはない水温。むしろ、目が醒めるくらい冷たい。そんな中に、涼くんは膝まで浸かって、更に沖へと行こうとしている。

「待ってて。とってくるから」

彼は、俯きがちにそう言つと、完全に私に背を向けてしまった。

チャプ…チャプン…

彼が足を進める度に、水が軽やかな音を立てる。

彼の周りで、水の珠が散っては遊ぶ。

——『とってくるから』って…まさか、あのアクセサリーを？

痛みを我慢して小石を払って、私は何とか腰を上げた。でも、もう遅かった。

彼はもう手が届かないほど沖に出てしまっていた。

私に出来ることといったら、叫ぶことだけ。

「りょーくーんー!!」

——確かに、アクセサリーが流されちゃったのは、残念なことだった。

だけど…だからって、涼クンがそんなことしなくてもいいのに…。

彼のオレンジ色のTシャツ姿は、どんどん遠ざかっていく。決してたくましくはない背中。

光をキラキラと反射する湖面に、飲み込まれていく彼の背中。

見ていて、不安で不安で堪らなくなる。

「涼くん!」

声を限りに呼ぶけれど、涼くんは止まってくれない。聞こえてるのかさえ、わからない。

もう、彼の背中は半分以上水に吸い込まれてしまった。

怖い。

怖いよ、涼くん。

このまま、涼くんが見えなくなっちゃったら——私、どうすればいいの。

アクセサリーなんて、どうでもいいよ。そんなことより、私をこれ以上怖がらせないで。

すると、ふっと彼がこっちを振り向いた。

くしゃつとした表情。

遠くからでも見えるのは、泣きだしそうな瞳。

「ごめん。…とれなかった…!!」

こちらに向かって叫ぶ、涼クンの声。

パシャン、と少し強めに打ち寄せる波の音。

そのコントラストが、妙に私の気持ちをかき乱した。

締め付けられるような、それでいてくすぐったいような。そんな感覚が、心臓から血管を伝って、全身へと運ばれていく。

「戻って…きて…」

叫ぶつもりだった私の声は、擦れて自分でも聞き取りにくい。

「涼クン…」

彼の名前を呼んだとき、さわさわつと風が吹き抜けた。

雲一つない、高い高い秋の空。

それを背景に、涼クンが立てる細かな水飛沫。

「ごめん…」

戻ってきた彼は、下を向いたまま言った。
胸までびしょ濡れになって。まるで、川で遊んだ小さな男の子みたいに。

「あれ以上は…行けなかった」

涼クンが悔しげに続ける。

「途中で、急に水が深くなって。波流の大事なモノ——取れなかった…」

「…な…」

何言ってるのよ。

私は、自分の身体が小さく震えてしまったのが判った。

「あんな物の為に…ばか…」

心配させないですよ。

私、本当に怖かったんだから。涼クンが戻って来られなくなったら、どうしよう、って…。

——でも、どうして。

どうして、こんな気持ちになるんだろ。涼クンが居なくなるこ

とが、こんなにも…怖いなんて…。

もしかして、私――

「波流？」

涼クンが、私の顔を覗き込んでいる。

それが、何だか恥ずかしくて。

「何でもないよ――」

私は、ニツコリと嘘をついた。

きっと、誤魔化せてはいないと思う。私の頬が、熱くて、真っ赤になってしまっているだろう事を。

「――ありがとう――…」

呟いた言葉は、

自分が発したものじゃないように聞こえた。

私が、本当に言いたいことって…なに？

この身体の熱さは、気持ちのざわめきは、なに？

「涼くん…」

続けるべき話題も無いのに、呟いてしまう彼の名前。私、本当にどうしちゃったの？

「…びしょ濡れ。風邪引くよ」

私が何とか絞りだした言葉は、ありきたりの会話だった。
「バンガローにタオルがあるから。髪だけでも拭かなきゃ」

「そだな…」

涼くんが、ちょっと遠い目をして頷いた。その柔らかい、ビターな色の髪から、水滴がポタポタと零れ落ちている。

「もう——無茶、しないでね」

出来る限り優しく言うと、私は涼くんに顔を見られないように、先を行き始めた。

「何、急いでんの？」

涼くんの声が、追い掛けてくる。

もうっ。ホントに、女の子の気持ちに疎いんだから…。

ねえ、涼くん。気付いてないでしょ？

私、

ドキドキしてたんだよ――…。

* 3 side 美亜 *

「おい、美亜」

哲が、いきなりあたしの名前を呼んだ。

「なにー？」

ちよつとイライラしながら返事する。うちわを動かす手は止めない。

「あたし、忙しいんだけど」

隆志が水をかけたせいで、消えかけてしまった焚き火。それにもう一度勢いを蘇らせるのは、至難の業。

本当は、男の子がやるべき仕事だと思う。だけど、ここにいる男共ときたら、食べることにしか目が無い。哲なんて、自分の焼おにぎりが水浸しになったからって騒ぎまくって、なにもしてない。

結局、火を起こすのはあたしの役目になってしまった。

さつきからずつとしゃがみこんでいるせいか、腰が痛い。

「美亜ー。なんか怒ってる？」

わざと甘えた声で聞いてくる哲。

ええ、そうですよ。
怒ってますよっ！！

自分は食べてばかりで、いいご身分よねっ。
あたしなんか、まだお肉食べてないっていうのに。

普通、こういうアウトドアって、男の子がリードするものなんじゃないの！？

あたしだって…あたしだって、食べたいわよおっ。

思わず、うちわをぶん投げてやりたくなる。

「美亜ってばー」

また哲だ。

「みーあーちゃんっ♪」

「何ようるさい！！用があるならハッキリ言いなさいよっ」

あたしは焚き火から顔を上げて、じゃがバタに舌鼓を打っている
哲を睨み付けた。

っ、と汗が頬を伝う。あんまり長い間、火の側にいたから。きつ
ともう、メイクはぐちゃぐちゃだ。

あたしの剣幕に驚いたのか、哲は刈り込んだ坊主頭を撫でながら、
パチパチと瞬きをした。

「焼きりんご…食べねえかな、と思ったんだけど…」

そう言っ、紙皿を差し出してくる。そこには、いかにも甘そうな蜜をたたえた焼きりんごが一つ、アルミホイルに包まれていた。

「お前、さっきから何も食ってないだろ」

うそ——。

——気付いてたんだ…。

一瞬だけ、うれしくなった。

だけど、ほんの一瞬だけ。

「気付いてんなら、仕事代わってよ!! あんたは食べてばかりじゃないっ」

気が付くと、自分の口からはそんな言葉が飛び出していた。

言ってしまったから、プチ・後悔。

——『ありがとう』って、言えたらよ買ったのに。

残念ながら、あたしはそんな可愛らしい性格じゃない。

だから、いつも波流と比較される。

女の子らしくて、可愛いくて清楚な波流は、気遣いもいい。男の子にとっては、理想のタイプ。

『守ってあげたくなる』ような…。

それにひきかえ、あたしは。

ちつとも女の子らしくなくて、言葉遣いは荒っぽくて。すぐ怒るし…。

『守ってあげたい』どころじゃない。むしろ、恐れられているような気がする——。

「——」ごめんな

哲が、ポツツと言った。

ええ、ええ、本当に。

その言葉が欲しかったわ。

——つて、

「ええええええ!?!」

あたしは、大声をあげてしまった。

「てっ、てっ、哲……もしかして今、謝ったのっ!？」

「そーだよ」

無然として、哲は言った。

「そんなに意外か？」

「意外だよつ。幼稚園の頃から、あたしに謝ったことなんて一度たりともなかったじゃないっ」

「そっぴやそうだな」

哲は、あたしに手を貸して立たせようとする。

「俺、代わるよ。ちょっと休んでろ」

——何よ、その優しい言葉は。似合わないわよ。

あたしには珍しくドギマギしていると、哲は力強い手であたしの腕を掴み、支えた。

「立てよ」

「あ……うん……」

言われるままに、立ち上がる。けれど、ずっと座っていたせいか、

腰が固まってしまったみたいに重い。

おまけに、一瞬くらあつと目の前が見えなくなった。

「美亜？」

哲が、あたしの名前を呼ぶ。

「大丈夫か？」

あたしは、——倒れまいとして、思わず——

哲にしがみついた。

「美亜」

哲の声が、すぐ耳元で聞こえる。

「立ちくらみした？」

何よ…なんで、なんでこんなに優しいの???

いつもと違うよ。

哲——

あたしをたぶらかしたって、何も出ないよ…。

だんだんと、視界が晴れてきた。

そして見えたのは、予想以上に近くにある、哲の顔。

野球少年らしい、ハッキリとした凛々しい面立ち。

いつもケンカしてたから、気付かなかった。こいつ、結構…男らしい…。

哲――。

「!?!」

そこまで考えて、あたしはハッと我に返った。

あたし、なんか変だ!!

今、絶対に哲にときめいてたっ!!

なんで!?

なんで哲なんか!!

馬鹿じゃないの、あたし!?

「…もっ、もう、大丈夫みたいっ」

あたしは、慌てて哲の腕から離れた。

「りんごは?」

哲が不思議そうに聞いてくる。

「…食べるっ」

あたしは、差し出された紙皿を乱暴に受け取った。
いつものように。

——なんで。

なんで優しくなれないの?あたしは…

りんごを口に運ぶと、バターと果実の甘味が、ふわんつと口中に
広がった。

「…おいしー…」

呟くと、哲が嬉しそうに笑った。

「よかった」

あたしは、こんなにもぶっきらぼうなのに。

優しくなかなれないのに。

哲は、いつも、あたしを受けとめてくれる。

時にはからかわれたり、拗ねられたり、嫌味を言われたりするけど。

でも、哲は、いつもあたしを見ていてくれる――。

なのに。

ごめんね。

『ありがとう』の一言が言えない。

こんなあたしで、ごめんね――――。

あたしは、大きく口を開けて、ガブツとりんごにかぶりついた。

それが、溢れてきた涙を隠すためだなんて――

哲には、気付かれたくない。

* 4 side 哲 *

りんごは、美亜によく似合う。

…美亜が焼きりんごを食べるのを身ながら、そんなことを考えていた。

甘いけれど、ちょっと酸っぱい。

りんごは、美亜そのものだ。

…本当は、もっと早く仕事を代わってやりたかった。美亜が、何か食べたそうにしているのも、判っていた。

だけど、俺は――出来なかった。

動けなかったんだ。

一生懸命に火を起こしている美亜の横顔が、とても綺麗に見えたから。

美亜のことは、ガキの頃から良く知っている。

だけど、あんなに綺麗な美亜の表情を見たのは初めてで。

メイクも崩れてしまっていて、汗だくだったけれど、そんな美亜が、本当に綺麗だと思った。

それは、『顔立ち』とか『気立て』とか…そんなものよりも、どこか高貴だった。

何かに一生懸命になっている人というのは、こんなにも心に強く訴えかけるものなんだと、身に染みて感じた。

俺と美亜は、幼なじみ。
ずっと、一緒に育ってきた。

だからと言っちゃなんだが、ケンカは日常茶飯事で、時には俺が泣かされたこともある。

だけど、美亜が泣いたのを見たことは、一度しかなかった。

忘れもしない、中学校の卒業式。

みんなバラバラの高校に行くことになって、それぞれが別れを惜

しんでいたときに、美亜だけは一人、どこかへと姿を消した。

俺は気になって、こっそり跡をつけた。

これは、今でも後悔している。なぜって、辿り着いた教室で、一人で嗚咽を洩らしている美亜を見たから。

見てはいけないものを、見てしまった。

美亜は、泣くところを、人に見られたくは無かったんだ。

でも、俺は見てしまった……。

なあ、美亜。

お前、色々自分の中に溜め込んでまうんだろ？

強がるなよ。

もっと、俺を頼れよ。

誰よりも美亜のことを知ってるのは、俺なんだからさ……。

「哲」

ふいに、美亜が言った。

りんごを食べ終えて、アルミホイルをきれいに畳んでいる。

「どうしたら…優しくなれるのかなあ？」

「は？」

思わず、聞き返してしまった。

「優しく？」

うん、と美亜は頷いた。

「波流みたいに、優しくなりたいのに。どうしても、なれない」

…美亜。

お前、そんなこと考えてたのかよ。

「バーカ」

俺は、わざと茶化して言った。

「優しい美亜なんて、気味悪いって」

これが、大失敗だった。

美亜はグツと目を見開いて、俺を睨み付けた。

「ほらねっ！ー！やっぱり、哲もあたしのこと優しくないって言うてるんだ！ー！」

「ちっ、ちげーよ。俺が言いたかったのは…」

「哲のバカ!!」

美亜は叫ぶと、うちわを俺の腕に押しつけた。

「哲は、あたしのこと——何も判ってないっ!!」

あんまり大声で怒鳴るから、隆志たちがワラワラと集まってきた。

「どうした？」

「またケンカかー？」

「ああ、いつものだよ。気にすんな」

俺は、ニツコリを装って、隆志たちに答えた。

「すぐ終わるから」

「…そうか？」

隆志は、トング片手に、汗で額に貼りついた前髪を掻き上げた。

「それなら良いけどよ。哲、お前ももう少し美亜に優しくしてやれよ？」

「あ…ああ…」

俺は、生返事をした。

隆志達は、早速バーベキューへと戻っていく。
一方の美亜は、俯いたまま、小さく震えていた。

…俺は、アホだ。

何を言っても、結局は美亜を傷つけてしまう。

美亜に『頼ってほしい』なんて思いながら、俺は美亜を判ってやれていないのかも知れない。

…俺は、無力だ——。

「美亜…」

ごめんな。

支えてやれなくて——

ただただ俯く美亜。

俺が、傷つけた。

一番、判ってやらなきゃいけないのに。

美亜にこんな顔、させちゃいけないのに…。

守ってやりたいのに。

「俺だって…優しくねえだろ…」

小さく、呟いた。

「優しく”なんて。なろうと思っても、なれねーよ…」

「…」

美亜は、黙ったまま、地面を睨み付けている。

「でもさ…」

俺は、深く息を吸い、そして吐いた。

胸が苦しい。

不思議な感覚だった。

ただ、ひたすら、美亜に伝えたかった。

どんなにぶっきらぼうでも、ケンカしても、美亜は美亜だと。

決して、他の誰にも劣りはしないのだと。

だけど。

俺も、不器用だから…

どうしたら、巧く伝えられるのか、わからない。

言葉が脳内で迷子になっているんだ。

どうしたら、

わかってもらえるかな。

美亜…——

俺は、

気取ったりしない、ありのままのお前が——

「好きだ…」

* 5 side 波流 *

バンガローの中は、煙の匂いもしなくて、涼しかった。

くすんだ色のフローリングに、窓から舞い込んだ紅葉が散らばっている。

真っ赤な葉。

黄色い葉。

サツと手で集めて、テーブルに乗せてみると、葉っぱのグラデーションができた。

「ね、涼くん。見て…」

綺麗でしょ、と言おうとしたけど、私は口をつぐんだ。

涼くんは、タオルで濡れてしまった身体を拭いている真っ最中。

オレンジのＴシャツを脱いで、上半身が顕になっていた。

細身の涼くん。

だけど、意外にもその身体は筋肉質で――。

そのギャップに、私はちょっぴりドキッとした。

さつきから、私は変だ。

まだ何となく顔が熱いし、ちょっとした会話でも、大きく反応してしまう。

こんなことは、初めてだ。

涼くんが、あたしを火から庇ってくれてから——彼を、今までとおなじように見る事が出来ない。

目を、合わせられない。

気恥ずかしくて。

「波流…？」

私が彼の背中を見つめていると、視線を感じたのか、涼くんは振り返った。

やだっ。

恥ずかしい…。

サッ、と目を紅葉に戻す。

もうつ。

早くＴシャツ着てよ…

ドキドキが、治まらないから――。

「波流…」

呼び声がして、涼クンが近寄ってくる気配がした。

身を固くしていると、彼は私の隣に立って、紅葉の葉をいじりだした。

もう、ドライヤーで乾かしたＴシャツを着ていたから、私は少しほっとした。

これ以上ドキドキしたら、きつと…涼クンに、ばれちゃう…。

「綺麗だな」

涼クンは、一枚の紅葉を目の高さに持ち上げた。

「うん」

私も、同じことをした。

目の前に、小さな紅葉がふたつ、並んだ。

「波流は、気にしてる？」

突然、涼クンが聞いてきた。

「みんなの前で…あんなことして」

私は、小さく首を振った。

「…気にしてないよ。びつくりしただけ」

「そっか。…なら、良かった」

それから、再び沈黙の時間が訪れた。

どうしてだろう。

全然、会話が続かない。

ここに来る前は、何の意識もせずに喋ってたのに…。

今は、些細なことにも気持ちが揺れる。

すごく、言葉を選んでしまう。

だけど、沈黙は辛くて。

何か喋んなきゃ、って必死になってる自分がある。

どうしよう。

涼くんが隣にいただけで、何だか息苦しい…

苦しいよ…。

ドキドキするよ…。

堪らないくらい——

助けて。

もう、どうしたらいいか、全然わかんないよ…。

* 6 side 涼 *

波流は、何も喋らない。

沈黙の時間だけが、ゆるやかに流れていく。

——僕の心のなかには、不思議と安らかだった。

波流と、こうして一緒にいられることが、幸せだった。

ずっと、彼女のことを想ってきた。高校1年の時、初めて出会ってから、ずっと。

でも、想いを伝えることは出来なかった。

…僕が、臆病だからだ。

想いを伝えたとき、波流に拒絶されるかもしれないことが、怖かった。

友達の間までいい。

…そう思った。

友達の間なら、気兼ね無く一緒にいられる。

一緒に笑ってられる。

だから、僕は自分の気持ちを包み隠した。

自分の本当の気持ちを顕にしたら、波流に嫌われてしまうかもしれない。

それが、怖かった。

でも、今。

僕は、究極の崖っ淵にいる――。

このままストレートに、想いを伝えるべきか。
それとも、友達のままでいるべきか。

正直、どちらを選んだとしても、後悔してしまいそうな気がする。

…どうしたらいいんだろうか…。

迷いに、キリはない。

不甲斐ない自分に、本当に腹が立つ。

しっかりしろよ、自分。 情けないぞ!!

「あのさ…」

「あのね…」

僕と波流が口火を切ったのは、全く同時だった。

「あ…ごめんなさい」

小さな声で、波流が言った。真っ赤に火照った頬は、まるで夕日を思わせる。

「いいよ。…先に喋って」

僕は、順番を譲った。レディ・ファーストだ。

波流は、何やら思い悩んでいる様子だった。右へ左へ、行ったり来たりする視線。浅い息遣い。

やがて、彼女はおもむろに唇を開いた。

「苦しい…」

「え？」

「苦しいよ…」

…えーと。

これはどういう意味なんだろう。

僕が混乱していると、波流は激しく首を横に振った。今にも泣き出しそうな表情で。

「苦しいよ、涼くん…」

「は…波流…？」

「涼クンのせいで…私、おかしくなっちゃったよ…!!」

叫ぶなり、彼女は僕の胸に飛び込んできた。

「わわっ!!」

僕は、焦った。

波流が、何を言いたいのか全然わからない。

こんな時、どうすればいいのか、僕は知らない!

パニックを起こしかけた自分自身を、深呼吸して何とか落ち着かせた。

波流は、僕の胸にしがみついたまま、じっとしている。

彼女が、こんな感情的になるのは、初めてだ。

僕は、恐る恐る波流の背中に腕を回した。

細くて華奢な波流の背中。力を入れすぎたら、折れてしまいそう
だ。

ふわ、とレモングラスの香りがした。

日だまりの匂い。

僕の大好きな、波流の匂い――。

そう。

僕が、伝えたいのは。

不甲斐ない僕が、それでもシツカリと伝えたいのは。

「波流……」

もう、迷わない。

自分の意志に、従うんだ。

「波流……」

波流が、細かく震えながら、顔を上げた。

僕は、小さく息を吸った。

「好きだよ——」

* 7 s i d e 美 亜 *

「え……」

息ができない。

何も見えない。

何も聞こえない。

すきだ、って。

哲が？

あたしのことを？

うそ。

嘘だよ。

そんなこと、あるはず無いじゃん……—

「ホントだよ」

哲が言った。

「嘘じゃねーよ……」

あたしは、何も答えられなかった。ただ、哲を見つめた。

怒りが、スウツと引いていく。

代わりに、混乱があたしを襲った。

「一生懸命なお前が…ありのままのお前が、好きだ…」

紅葉が、はらはらと散る。

「好きだよ、美亜…」

何度も、何度も繰り返す哲。

「い…いつから…そんな…」

あたしは、まともに喋ることすら出来ない。

哲に。

哲に告白された…。

「中学の卒業式から」

哲が答えた。

「ずっと。ずっと好きだった」

近くで、仲間たちがワイワイとバーベキューを楽しんでいるのが聞こえる。

けれど、それはまるで別世界の出来事。
ずっと遠くから聞こえてくる音。

「美亜を…守りたいって、思った」

哲が続けている。

「一緒にいて、楽しいひとだから。一緒にいて、安らげるひとだから」

「哲…」

「ケンカもする。お互いぶつきらぼう。だけど…俺は、美亜が好きなんだ…」

繰り返される言葉。

『好き』

こんなにも温かい響きだとは、知らなかった。

まさか哲から言われるとは思ってなかった。

でも――

あたしは、それを嬉しく思っている自分に気付いた。

ウソみたいだ。

あたしが、哲に心を許してるなんて…。

でも、ウソじゃない。

ホントに、ホントに、胸があったかくなって。

泣きたくなるくらい、感激している自分がある。

「嬉しい…」

あたしは、小さく呟いた。

素直に言うのは、気恥ずかしいけれど。

「嬉しいよ……」——ありがと、哲」

ようやく、その言葉はあたしの唇から放たれた。

「美亜は？」

不安げに、哲が聞いた。

「美亜は、俺のこと——どう思ってたんの……？」

あたしは、クスツと笑った。

心配そうな哲の顔が、すごく可愛らしかったから。

でも、ここはからかったりするシチュエーションじゃないよね。

『伝える』場なんだよね。

あたしの、

素直なキモチを。

「あたしも。好きだよ。

哲……」——」

「美亜……」

あたし達は、見つめあった。

哲の瞳の中に、あたしが映ってる。

きつと、あたしの瞳の中にも、哲が住んでる。

きつと、これからもずっと――。

ふいに、哲の顔が近づいてきた。

あたしは、微笑んで、目を閉じた。

ねえ、哲。

あたしたち、これからも沢山ケンカするんだろうね。

だけど、ね。

いつまでも、忘れないよ。

あんたが、こんなあたしを、丸ごと好きだって言ってくれたこと。

そんなことを考えてる間に、

優しいキスが、

あたしを包み込んだ――。

* 8 s i d e 波流 *

『好きだよ…』

その言葉は、竜巻のように私を襲った。

苦しいよ。

苦しいよ、涼クン。

なんで、私をこんなに苦しくさせるの??

意地悪だよ…。

＊side涼＊

その言葉を吐き出した途端、波流がビクンと震えた。

ああ、

もう後戻りは出来ない。

時間は巻き戻せない。

僕は、何も言えないまま、波流を抱きしめる腕にギュツと力を込めた。

折れてしまいそうな波流の背中は、とても熱い。

声をかけることも出来ないまま、僕は波流を抱きしめ続けた。

波流は、何も言わない。

けれど、僕の腕から逃げていくこともしない。

二人の間にあるのは、沈黙と温もりだけだった。

レモンガラスの香りが、僕を優しく包み込んでいた――。

* side 波流 *

ぎゅっ、と抱き締められて――私の思考は、終わった。

湖畔から抱えてきた胸のざわめきが、すつつと癒されていく。

息苦しいことに変わりはないけれど、でも……

それはもう、心地よい息苦しさへと変質していた。

涼クンに抱き締められることが、こんなにも安らかなものだななんて。

私は、彼の温もりを感じた。

そして、彼の鼓動を感じた。

生きている証。

誰かのことを、好きになれる証。

「涼…」

私は、彼の名前を呼んだ。

初めての『呼び捨て』。

くすぐったい恥ずかしさも、温もりの内に薄れていく。

「波流——」

涼も、私の名前を呼んだ。

言わなくても、伝わっているよね？

気付いているよね？

私の気持ち…。

ずっと手に摘んでいた紅葉の葉が、はらりと落ちた。

その時、

私の唇は、柔らかな暖かさに触れた。

涼の、唇だった。

生まれて初めての、キス――。

私たちは、いつまでもそうしていた。

紅葉散る、湖畔で…。

* E N D *

（後書き）

こんにちは、

奥山メイです！！

初の短編、楽しんで頂けましたでしょうか？

舞台のバンガロー村は、西湖に実在します。秋には、本当に紅葉が美しい場所です。機会がありましたら、是非行ってみて下さいね＊

HPを作りました！！これから、色々な情報を載せていく予定です。

Passwordは『mrjustice』、トップページの“Mei”の表示をクリックすると入れます。

<http://x62.peps.jp/cosmoswind/>
是非遊びに着てみて下さい（＊＾－＾＊）お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824j/>

僕らのままで

2010年10月10日10時44分発行